

「挑戦と希望の地域支援・訪問看護ステーションと他機関との連携支援」
のイベントに参加して！

内田 昌宏

熱意と誠意を腹に据えた支援職がたくさんいることにとても心強い思いと同時に、一抹の悲しさも感じ複雑な思いで帰途についたのです。

というのも、
事例を聞くと、どこかなにかの社会制度につながっている人（通院してるとか、市の福祉課が担当しているとか、介護サービスを利用しているとか）がほとんど。たといつながっていないなくても、つながりたい意思（病院に行きたい！ 仕事したい！）は持っている人についての支援のようで、

それはつまり、
その人が社会でやっていきたい意思があり、そのために使える制度は使いたい！ という健全な依存心を持っているのなら、熱意と誠意にあふれた支援職に出会える。

一言で言うなら、「社会適応がいいと社会のサービスの恩恵にあずかれる」ということがはっきりしたということで、

裏を返せば、社会制度サービスを利用した方が暮らしが楽になるし健康にもなるし今後の生活リスクが減るということが客観的に見てとれる人がいたとして、その人が「社会で（力強く）やっていきたいありません。ひっそり暮らしたいだけです。今のところ暮らせてるんで特段サービス（サポート）もいりません」という思いならば、制度利用はしないだろうし、都合、その人は制度に載らないので、熱意と誠意にあふれた支援職のサービスを受けられない。
ってことがはっきりしたからです。

一方で、制度の不備によって条件に当てはまらずサービスが受けられないケースも少なくない感じ。これについて当事者たちが声を上げ続けることが肝心なところのよう。

とこう考えると、実のところ医療制度、介護保険制度、障害者福祉制度、困窮者福祉制度、子育て支援制度、児童福祉制度などなど、私たちの暮らしの助けになる制度は実はたくさんあるのだけれど、
その人が、地域で安全で健康的に暮らせるかどうかは、
そもそも制度を知っているってことが大前提だけど、
その人が制度を（あるいは社会を）利用する意思があるかどうか？
そして制度を利用できる条件に当てはまるかどうか？ にかかっているみたい。

制度を知っていて、利用の意思があり、かつ条件に当てはまる。
ということが明快になって、
こんな結構高いハードルをクリアしないと安全で健康に暮らすのは難しい社会
なんだなあ。この現実はちと悲しいなあ。
との思いが胸に残ったのでした。

最後に、
会場でも、グレーゾーンの人へのサービス不足について指摘が上がっていたけど、

「制度」はそこからこぼれる人がかならず出てくるのだから、制度の中で熱意と
誠意にあふれた支援をする人たちには、こぼれた人へのまなざしを忘れないで
いて欲しいと思うのでした。
きっと制度に載る日が来るからね。

関係皆さんに心より感謝。